

第2章 特別史跡安土城跡の概要

1. 位置と環境

(1) 立地

安土城が築かれた安土山は琵琶湖東岸の湖岸近くに位置する標高 198mの低い山である。標高 432mの織山とは尾根続きで、その間を北腰越峠が画している。

安土山は近江八幡市と東近江市の市境に位置し、平地との比高差は約 110mである。安土山の周辺にはかつては内湖が広がっていたが、昭和 17 年から始まる干拓事業によって陸地化され、現在は西の湖と伊庭内湖の一部が残るだけで、周囲には田地がひろがっている。

安土山の南西の微高地はかつて城下町があった場所であるが、現在も住宅地が広がっている。住宅地を通る街路には城下町時代の道を踏襲したものが多い。また安土山南面には田地が広がっているが、ここは住宅地よりも一段低い地形で、信長時代は湿地であったものが、江戸時代に水田として開発された場所である。

主要な街道としては信長が整備した下街道があり、城下町を通過して安土山の南面を西から東に進み、北腰越峠を越えて北に進む。下街道のうち城下町を通る道筋は現存しており、山の南面を通る道についても、大手正面までは現在の県道 2 号線と一致している。その後県道 2 号線は山裾沿いに道が曲がるが、かつての下街道はそのまま直線的に進み、北腰越峠に南から取りつくように道が進んでいた。

このように、安土山周辺の景観には信長時代の様子をうかがわせるものが少なくない。

(2) 関連遺跡・文化財の概要

特別史跡安土城跡の周辺には、安土城との関わりで戦国から近世初期の遺跡が広がっている。隣接する織山に位置する史跡観音寺城跡は近江守護六角氏の居城で、安土城以前に石垣が多用された城として注目されている。旧安土城下町跡は安土城下町遺跡として発掘調査が行われている。小規模な調査がほとんどであるが、一部で信長時代の町屋の遺構が見つかっている。

旧安土城下町内の寺社には多くの文化財が伝来している。しかし一部を除き、大半の寺院の由緒は江戸時代より以前にさかのぼらないため、そこに伝来する什物も比較的新しいものが多い。一方神社は中世以前にさかのぼるものが多く、信長時代までさかのぼる寺院と合わせ、いずれにも中世以前の什物が見られる。

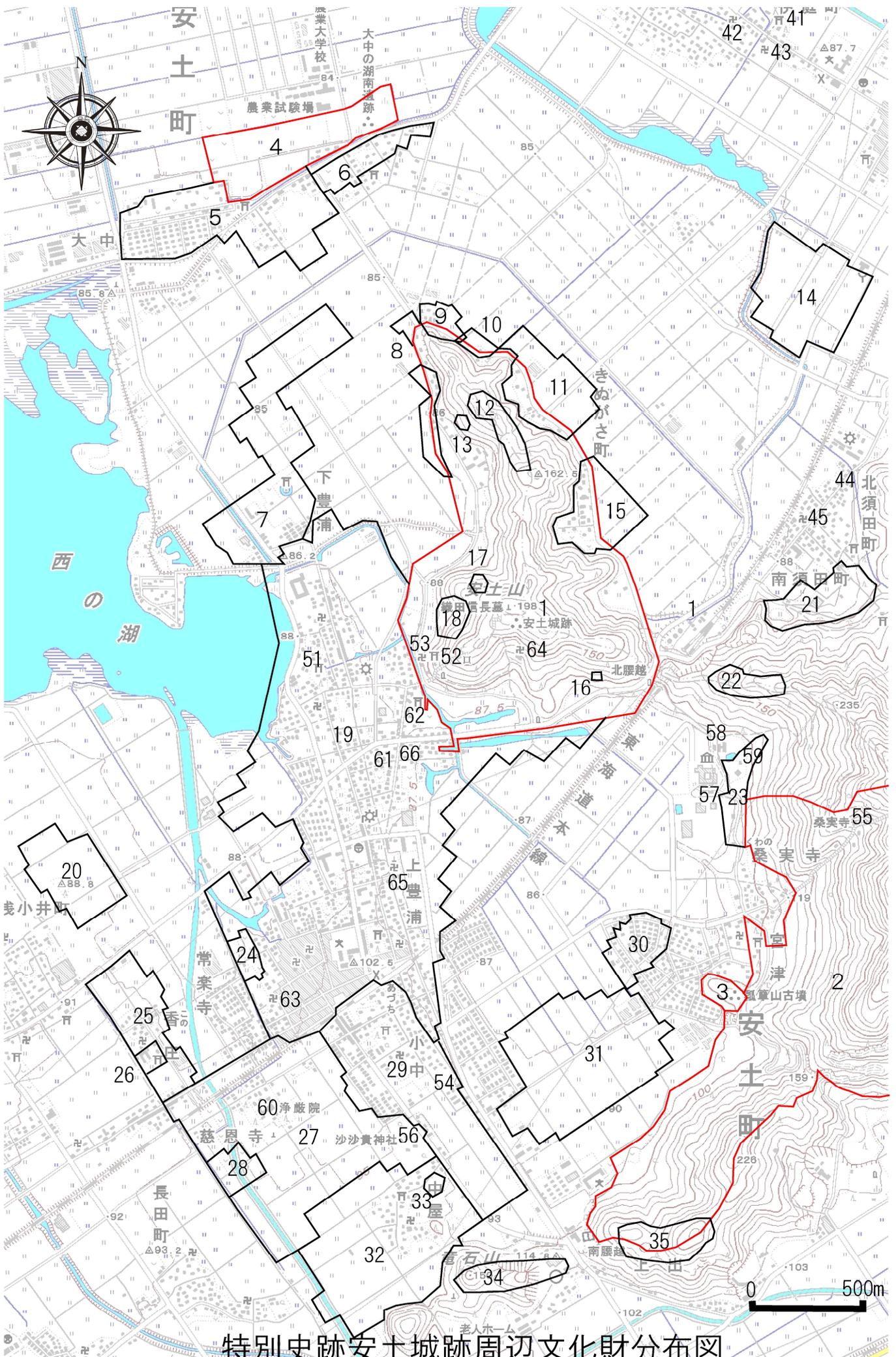
2. 安土城の歴史

(1) 築城以前

安土山周辺の歴史は縄文時代までさかのぼることができる。山の周囲から縄文時代の遺物が発見されているほか、山の西側には縄文時代の集落遺跡である弁天島遺跡が存在する。

弥生時代にも人々の生活の痕跡は存在する。安土山の北に広がる大中の湖の南の砂州からは、弥生時代中期の水田跡が発見され、大中の湖南遺跡として史跡に指定されている。

古墳時代の遺跡としては安土山自体にも古墳が存在する。また、安土山から尾根続きにつなが



特別史跡安土城跡周辺文化財分布図

番号	遺跡名	時代	種別	所在地
1	特別史跡安土城跡	安土桃山	城跡	近江八幡市安土町下豊浦
2	史跡観音寺城跡	室町	城跡	近江八幡市安土町下豊浦・東近江市きぬがさ町
3	史跡安土瓢箪山古墳	古墳	古墳	近江八幡市安土町桑実寺
4	史跡大中の湖南遺跡	縄文～平安・室町	集落跡	近江八幡市安土町下豊浦
5	芦刈遺跡	縄文・弥生	散布地	近江八幡市安土町下豊浦
6	大中の湖南遺跡	縄文・鎌倉	集落跡	東近江市きぬがさ町
7	弁天島遺跡	縄文	集落跡	近江八幡市安土町下豊浦
8	竜ヶ崎A遺跡	縄文・白鳳	寺院跡・集落跡	近江八幡市安土町下豊浦
9	獅子鼻B遺跡	縄文・弥生	集落跡	東近江市きぬがさ町
10	獅子鼻A遺跡	室町	寺院跡	東近江市きぬがさ町
11	城東B遺跡	縄文・弥生	散布地	東近江市きぬがさ町
12	安土山古墳群	古墳	古墳群	近江八幡市安土町下豊浦
13	竜ヶ崎B遺跡	白鳳	寺院跡	近江八幡市安土町下豊浦
14	元番匠遺跡	その他	散布地	東近江市能登川町
15	城東A遺跡	縄文・弥生	散布地	東近江市きぬがさ町
16	蓮池上古墳	古墳	古墳	近江八幡市安土町下豊浦
17	安土山中世墳墓群遺跡	鎌倉・室町	墓跡	近江八幡市安土町下豊浦
18	九品寺遺跡	奈良	寺院跡	近江八幡市安土町下豊浦
19	安土城下町遺跡	安土桃山	城下町跡	近江八幡市安土町下豊浦・上豊浦・常楽寺
20	新開遺跡	弥生～室町	集落跡	近江八幡市安土町常楽寺
21	五十遺跡	室町	館跡	東近江市南須田町
22	北腰越古墳群	古墳	古墳群	近江八幡市安土町下豊浦
23	桑実寺A遺跡	古墳～中世	散布地	近江八幡市安土町桑実寺
24	常楽寺城遺跡	中世	城跡	近江八幡市安土町常楽寺
25	香庄遺跡	古墳～中世	散布地	近江八幡市安土町香庄
26	熊野神社古墳群	古墳	古墳群	近江八幡市安土町香庄
27	慈恩寺遺跡	古墳～室町	集落跡	近江八幡市安土町慈恩寺
28	金剛寺遺跡	中世	寺院跡	近江八幡市安土町慈恩寺
29	小中遺跡	古墳～室町	集落跡	近江八幡市安土町小中
30	江頭遺跡	弥生～室町	集落跡	近江八幡市安土町宮津
31	西才行遺跡	古墳	集落跡	近江八幡市安土町上豊浦・下豊浦
32	中屋遺跡	弥生～室町	集落跡	近江八幡市中屋
33	高塚古墳	古墳	古墳	近江八幡市中屋
34	常楽寺山古墳群	古墳	古墳群	近江八幡市中屋・小中
35	上出古墳群	古墳	古墳群	近江八幡市安土町上出

特別史跡安土城跡周辺の埋蔵文化財

東近江市

番号	種別	名称	員数	所有者	時代	所在地
41	県建	大浜神社仁王堂	1棟	大浜神社	室町	伊庭町
42	市絵	光明本尊	1幅	正厳寺	室町	伊庭町
43	市彫	木造阿弥陀如来坐像	1軀	妙金剛寺	平安	伊庭町
44	市書	三枝家文書	108点	北須田区	江戸～明治	北須田町
45	県建	超光寺表門	1棟	超光寺	桃山	南須田町

近江八幡市

番号	種別	名称	員数	所有者	時代	所在地
51	市建	活津彦根神社本殿	1棟	活津彦根神社	江戸	安土町下豊浦
52	重彫	厨子入木造薬師如来坐像	1軀	石部神社	平安	安土町下豊浦
53	重彫	木造千手観音立像	1軀	会勝寺	平安	安土町下豊浦
54	市建	旧伊庭家住宅	1棟	近江八幡市	大正	安土町小中
55	重絵	紙本著色桑実寺縁起	2巻	桑実寺	室町	安土町桑実寺
	重建	桑実寺本堂	1棟		室町	安土町桑実寺
56	県建	沙沙貴神社本殿・中門・透塀・権殿・ 拜殿・楼門・東回廊・西回廊	8棟	沙沙貴神社	江戸	安土町常楽寺
	市工	石灯笼	1基		鎌倉	安土町常楽寺
57	県建	旧柳原学校校舎	1棟	滋賀県	明治	安土町下豊浦
58	県建	旧安土巡查駐在所	1棟	滋賀県	明治	安土町下豊浦
59	重建	旧宮地家住宅	1棟	滋賀県	江戸	安土町下豊浦
60	県書	称讚浄土仏撰受経	1巻	浄厳院	奈良	安土町慈恩寺
	県書	織田信長朱印状	1幅		桃山	安土町慈恩寺
	市絵	絹本著色観無量寿経变相図	1幅		鎌倉	安土町慈恩寺
	市建	浄厳院不動堂	1棟		江戸	安土町慈恩寺
	市建	浄厳院鐘楼	1棟		江戸	安土町慈恩寺
	市工	宝篋印塔	1基		南北朝	安土町慈恩寺
	市彫	木造釈迦如来立像	1軀		鎌倉	安土町慈恩寺
	重絵	絹本著色山王権現像	1幅		鎌倉	安土町慈恩寺
	重絵	絹本著色阿弥陀聖衆来迎図	1幅		鎌倉	安土町慈恩寺
	重建	浄厳院本堂・楼門	2棟		室町	安土町慈恩寺
	重工	厨子入銅製舍利塔	1基		室町	安土町慈恩寺
	重彫	木造阿弥陀如来坐像	1軀		平安	安土町慈恩寺
	重彫	厨子入銀造阿弥陀如来立像	1軀		鎌倉	安土町慈恩寺
	61	県書	大般若波羅蜜多経		605帖	正禅寺
62	県絵	絹本著色薬師十二神将像	1幅	新宮神社	室町	安土町下豊浦
	市絵	絹本著色釈迦十六善神像	1幅		室町	安土町下豊浦
	市建	新宮神社大宮社	1棟		江戸	安土町下豊浦
	市建	新宮神社拜殿	1棟		江戸	安土町下豊浦
63	重工	梵鐘	1口	善徳寺	平安	安土町常楽寺
64	市絵	絹本著色織田信長像	1幅	摠見寺	江戸	安土町下豊浦
	市絵	安土古城図	1幅		江戸	安土町下豊浦
	市工	伝豊臣秀吉所用陣羽織	1領		桃山	安土町下豊浦
	市工	伝織田信長所用陣羽織	1領		桃山	安土町下豊浦
	市工	判金	2枚		桃山	安土町下豊浦
	重建	摠見寺三重塔	1棟		室町	安土町下豊浦
	重建	摠見寺二王門	1棟		室町	安土町下豊浦
	重工	鉄罫	1箇		室町	安土町下豊浦
	重彫	木造金剛二力士像	2軀		室町	安土町下豊浦
65	重彫	木造地藏菩薩立像	1軀	東南寺	平安	安土町下豊浦
66	登録	東家住宅主屋・土蔵・石垣		東康彦	江戸	安土町下豊浦

る織山の支尾根上に県内最大級の前方後円墳である史跡安土瓢箪山古墳が存在する。

古代においても大中の湖南遺跡に隣接する芦刈遺跡からは石組突堤が発見され、琵琶湖水運との関わりが考えられる。

中世になると安土山の周囲にいくつかの荘園が認められる。特に、山の南西部には大和国薬師寺領豊浦荘が広がり、安土城下町の前庭となる集落が存在したことが確認できる。

豊浦荘は天平感宝元年(749)に聖武天皇の勅願によって薬師寺に施入されたもので、その範囲はおよそ現在の近江八幡市安土町下豊浦・上豊浦に一致する。荘内には活津彦根神社や新宮神社など現存する神社があったことが史料に見られる。

安土山の西に広がる西の湖の南にある常楽寺湊は中世から機能していたことが確認される。八幡が港として整備される以前は、周辺地域の中核的な港として琵琶湖水運の中で重要な地位にあった。また、多くの物資や人が集まったと考えられることから、港にともなう集落の存在が想定できる。

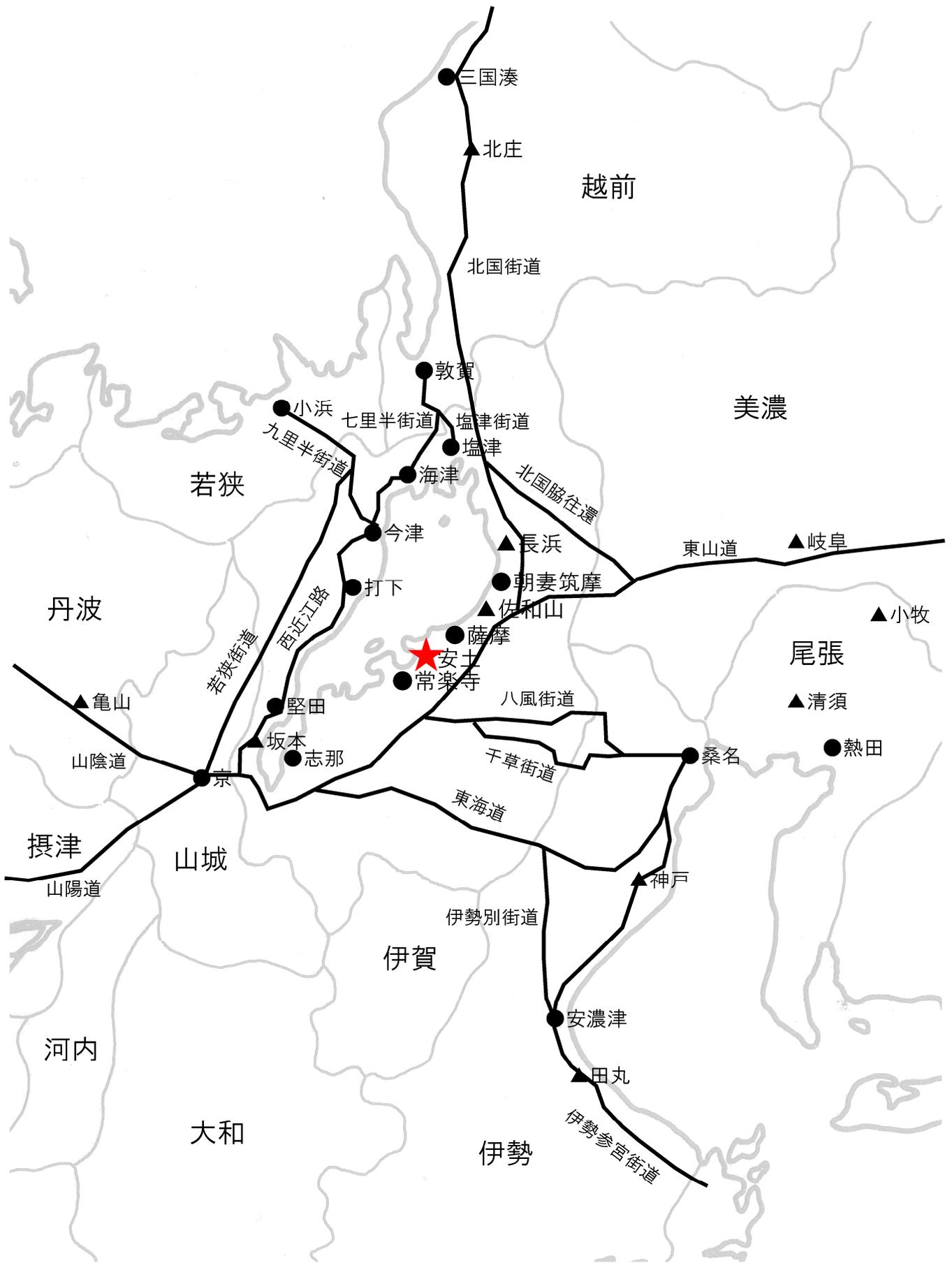
このように、安土山周辺では古くから人々の活動があったと考えられることから、信長が安土を居城として選定するにあたり、そうした旧集落の存在が大きな要因となったであろうことは想像に難くない。

(2) 築城から廃城へ

近江は琵琶湖を中心として東西南北の陸上・水上の流通の要に位置していた。信長が新たに築城の地として選んだ安土は、それまで信長の居城であった岐阜と京の中間にあり、近江国のほぼ中央、琵琶湖の東岸に位置する。東西交通の幹線である東山道が南方を通り、安土とは下街道でつながる。また東山道から八風街道や千草街道が分かれて伊勢と近江を結び、今津や海津などの湖北の港から九里半街道や七里半街道を経て小浜、敦賀といった日本海岸の港につながる。近江は伊勢湾と日本海をつなぐ南北交通の要にも位置している。また、琵琶湖岸には数多くの港が存在し、多くの人や物が湖上を行き交っていた。安土の近くには常楽寺湊があり、湖東地域の物資の琵琶湖水運との結節点となっていた。信長自身も岐阜と京との往来の途次、常楽寺を頻繁に利用している。信長は安土築城にあたって常楽寺湊を城下町に取り込んでいるが、それはこの地の利点を熟知しており、早くから築城場所として念頭においていたものと思われる。

信長が安土築城を開始するのは天正4年(1576)正月のことである。しかしそれ以前、元亀元年(1570)に安土城が築かれたことが『信長公記』に記されている。同年4月、越前攻撃中に浅井氏の離反を知った信長は急遽京へとって返す。その後岐阜へ戻る際に近江の要所に家臣を配置しているが、中川重政を安土城にいられている。ただ、この時の安土城が安土山の城を指すかどうかは定かではない。安土山西麓の下豊浦村には安土という集落があり、あるいはそこに築かれた城を指すのかもしれない。たとえ安土山に城が築かれていたとしても信長の安土城とは異なり、合戦に備えての山城であったと思われる。

信長は、安土築城の前年には越前一向一揆を殲滅させて領国の一定度の安定を得ている。また同年、長篠の戦いで武田勝頼を破り、大坂本願寺と和睦をするなど、天正3年は対外的にも安定を得た年となった。また、この年の暮れには嫡子の信忠に家督を譲っている。しかし、これは信



近江国周辺の城郭と交通路

- 主な湊
- ▲ 織田政権の城郭
- 主な街道

長が隠居して一線を退いたのではなく、戦国大名としての地位を信忠に譲り、自身はより上位の存在である天下人として統一事業を進めていくことを意味している。まさに安土城は天下人信長の拠点として築かれたのである。

築城にあたっては「尾・濃・勢・三・越州・若州・畿内の諸侍、京都・奈良・堺の大工・諸職人等召し寄せられ」と『信長公記』に記されているように、領国中から多くの人夫と伝統技術を持った職人を動員している。天正5年(1577)6月には城下町に宛てて楽市楽座の掟書を発布しており、ほぼ同時に城下町建設が始まった様子がかがえる。この掟書は城下町の振興を意図して出されたものであり、多くの人々が安土の町を訪れ、大いなる賑わいを見せていたことは、安土を訪れた宣教師の記録に記されている。また、遠国の戦国武将も安土を訪れていたことが様々な記録に記されている。信長は天正10年正月に、完成したばかりの行幸御殿を武士や町人など多くの人々に見物させており、安土を大勢の人に見せようとしていたことがうかがえる。

安土城の完成については明らかではない。そもそも何をもって完成とするのかも諸説あり、一説には未完成のまま廃城を迎えたというものもある。しかしながら、一応の区切りをあげるとすれば、天主の完成であろう。天正7年(1579)5月、信長は安土城天主に移り住んでおり、この時には天主をはじめとする主郭部が完成していたと考えられる。しかしその3年後の天正10年(1582)6月2日、本能寺の変を迎える。

本能寺の変で信長は世を去ったものの、安土城がそれとともに廃城になったわけではない。本能寺の変から3日後、6月5日明智光秀が安土城に入城する。翌6日は朝廷から安土に勅使が派遣されているが、これは光秀の政権が承認されたことを意味している。その後、光秀は安土に留守居として女婿の明智秀満を残し上洛する。そして、毛利攻めより急きょ取って返した羽柴秀吉と6月13日、洛西山崎の地で戦った。敗れた光秀は落ち武者狩りにあつて命を落とした。

安土城は、6月14日から15日未明にかけて炎上する。炎上の原因については定かではない。伊勢から駆け付けた織田信雄が焼いたとするもの、城下の火災が飛び火したとするもの、留守居の明智秀満が城を出る時に焼いたとする説があるが、いずれも確かな根拠に欠ける。この時、信雄は安土には来ておらず、また城下と炎上した主郭部とを結ぶ百々橋口道からは炎上の痕跡が見つかっていないことから、前の二説については成り立たない。秀満放火説については、当時の敗軍の作法にもかなっていないことから、この中ではもっとも蓋然性の高いものといえよう。

ともかく、この時の火災で炎上したのは主郭部だけだったことが発掘調査で確認されており、山腹から山麓にかけてはまだ諸施設が焼け残っていたのである。安土城がこの時点で廃城となっていなかったことは、その後の歴史が証明している。6月16日に、明智光秀を討った羽柴秀吉と織田信孝が安土に入城し、また12月には信長とともに斃れた嫡男信忠の遺児三法師が安土城に入城している。翌年正月には織田信雄が入城し、安土城下に向けて掟書を発布している。

こうした行為は、自身が信長の後継者として天下人をつぐものであることをアピールするものである。信長の仇を討った秀吉とはいえ、すぐさま天下人になれるわけではなく、いまだ織田氏の天下を象徴する城としての安土城の機能は存続していたのである。

秀吉は最初に織田信孝を滅ぼし、これと結んだ柴田勝家を天正11年(1583)4月の賤ヶ岳の戦いで倒した。そして天正12年(1584)3月にはじまる小牧・長久手の戦いは織田氏の天下の幕引きと

織田信長と安土城の歴史

年代		事項
1534	天文 3	尾張下守護代織田大和守家の三奉行の一人織田信秀の嫡男として誕生
1557	弘治 3	下守護代織田彦五郎を滅ぼし、清須入城
1559	永禄 2	岩倉城攻略 尾張を掌握
1560	永禄 3	桶狭間の戦いで今川義元を討ち取る
1563	永禄 6	小牧山城築城
1567	永禄10	美濃攻略 岐阜入城
1568	永禄11	9/12六角承禎・義治父子信長の攻撃を前に観音寺城を退城 10月足利義昭をともない上洛
1570	元亀元	5/12中川重政を安土城に配置 6/28姉川の戦いで浅井・朝倉連合軍を破る 9月大坂本願寺挙兵 石山合戦始まる
1571	元亀 2	9/12延暦寺焼き討ち
1573	元亀 4	7/18足利義昭、京都を追われ河内若江に逃亡 8月越前の朝倉氏を滅ぼす 9/1浅井長政、小谷城で自刃
1574	天正 2	7月伊勢長島一向一揆を殲滅
1575	天正 3	5月長篠の戦いで武田勝頼を破る 8月越前一向一揆を殲滅 11月従三位権大納言兼右近衛大将任官 11/27嫡子信忠に家督譲渡
1576	天正 4	正月中旬、安土城築城開始
1577	天正 5	6月安土山下町中に楽市楽座の掟書を発布する
1579	天正 7	5月完成した天主に信長が移り住む
1580	天正 8	3月顕如、大坂本願寺より退去 閏3月安土城下にセミナリヨ建設 8月教如、大坂本願寺より退去 石山合戦終結
1581	天正 9	正月安土城下佐々木宮で能興業 安土城下松原で左義長・馬揃え 7/15盂蘭盆会 安土城・摠見寺に提灯を吊るす
1582	天正10	5月徳川家康安土来訪 摠見寺で能興業 6/2本能寺の変で信長死去 6/5明智光秀安土入城 6/14安土城の天主・本丸等が焼失する 6/16織田信孝・羽柴秀吉安土入城 6/27清須会議
1583	天正11	正月織田信雄安土入城、山下町中に掟書発布 4月賤ヶ岳の戦い
1584	天正12	3月～小牧・長久手の戦い 5月安土城下侍衆申合条々 12/5織田三法師、安土より坂本に移る
1585	天正13	八幡山城築城 安土城廃城

なる戦いであった。この戦いで羽柴秀吉は織田信雄と結んだ徳川家康と戦うが、両者を政治的に屈服させ、新たな天下人となる。織田氏の天下が消滅したことにより、それを象徴する安土城は必要なくなり、この時点で廃城となるのである。天正13年(1585)9月、秀吉は甥の秀次に近江湖東地域において43万石の領地を与え、八幡山への築城を命じる。築城にあたっては、安土城下から八幡山城下へと町ぐるみ住人を移住させたことが八幡町人の記録や同名の町の存在から明らかであり、また安土城の部材が八幡山城へ移された可能性も指摘されている。

(3) 廃城後の歴史

安土城が廃城となったからといって安土山がその後まったく荒廃していったわけではない。山内には信長が建立した惣見寺が残り、現在にいたるまで活動を続けている。

惣見寺が最初に史料の上に登場するのは、天正9年(1581)のことである。この年の孟蘭盆会で、信長は惣見寺をはじめとした城内各施設に提灯を吊るし、人々を驚かせた。天正10年には安土にやってきた徳川家康を接待するため、惣見寺に能舞台をこしらえている。

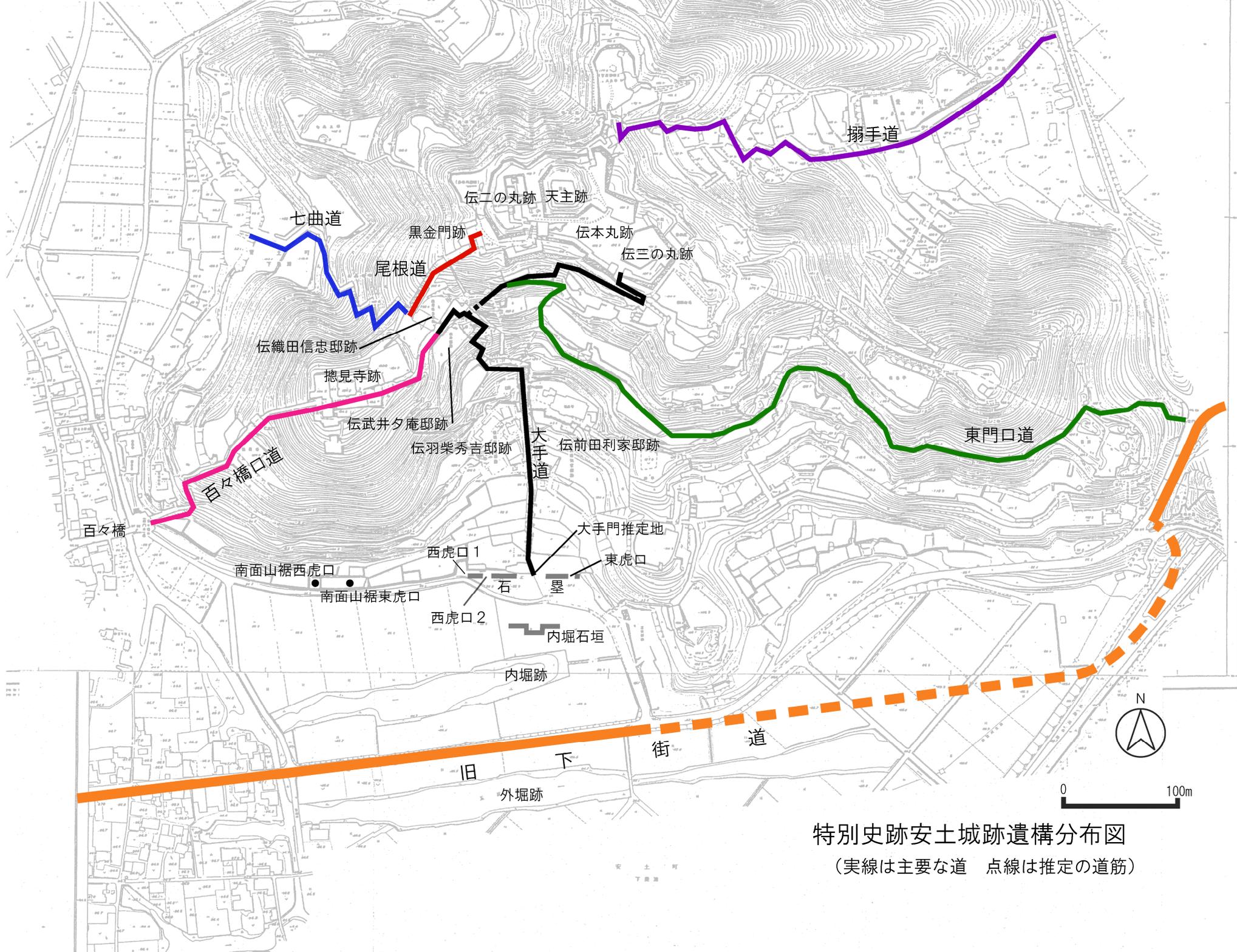
豊臣時代には、天正20年(1592)豊臣秀吉より寺領として100石を与えられている。その領地は蒲生郡須田村(現東近江市南須田町)にあたるが、これは明治維新まで続く。慶長9年(1604)には豊臣秀頼によって惣見寺の伽藍の拡張が行われ、本堂の西側に書院・庫裡が造られた。また、伝承ではあるが、天正11年に伝二の丸跡に信長廟が建てられた。

元和3年(1617)、徳川秀忠が惣見寺の寺領を227石に加増し、安土山の支配権を認めた。加増された127石は安土山の西側の蒲生郡下豊浦村(現近江八幡市安土町下豊浦)にあたる。以後、明治維新までこの寺領と安土山の支配権は変わらない。その間、歴代住職に織田信雄の子孫の系統である丹波柏原藩主の養子を迎え、織田家との密接な関係を保ちながら信長の菩提寺としての活動を続けている。50年ごとの遠忌供養のほか、下豊浦村の領主である仁正寺藩主市橋氏などがしばしば伝二の丸跡の信長廟への参拝に訪れており、そのため城内道の簡易な清掃や整備が行われたことが惣見寺に伝わる古文書に記されている。その後惣見寺は嘉永7年(1854)に火災で本堂や書院・庫裡などの主要伽藍を焼失するが、大手道上の現在地に仮本堂を移し、活動を続けている。

また、伝長谷川邸跡には織田信雄から4代にわたっての供養塔があるが、これは信雄の子孫の系統である大和天宇陀藩歴代藩主の供養塔である。信雄の子孫は後に丹波柏原藩主となるが、惣見寺との密接な関係からこの4基の供養塔が大和天宇陀から移されたと考えられる。

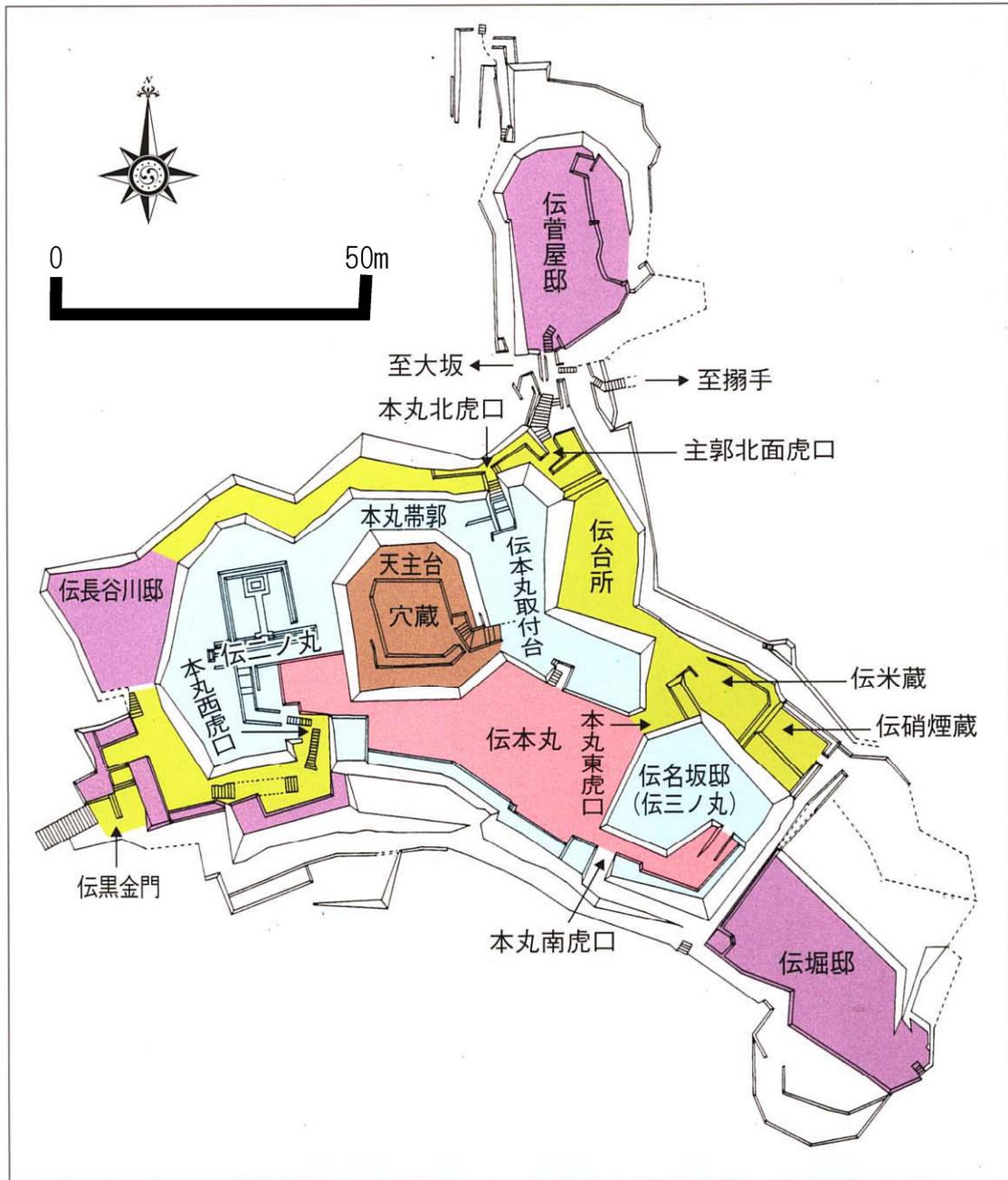
明治にはいと明治4年(1871)の上知によって寺領を失う。安土山も境内周辺を除き、国有林となる。幕末の火災で焼け残った建物も他所へ売却されたようで、現在は二王門と三重塔が残るのみである。また、裏門が東近江市南須田町の超光寺の表門として売却されたことが超光寺に伝わる古文書に書かれている。信長時代の安土山に存在した建物のうちで現存するのが確認できるのはこの3棟だけである。

また、大正末から昭和初期にかけて、文筆家の徳富蘇峰が安土山を訪れている。蘇峰の代表作である『近世日本国民史』執筆にあたっての調査のためであるが、調査の枠を超えて当時の惣見寺住職と交流を持っていた。大手口・百々橋口・東門口に蘇峰自身の揮毫による「安土城趾」の



特別史跡安土城跡遺構分布図

(実線は主要な道 点線は推定の道筋)



特別史跡安土城跡主郭部平面図



特別史跡安土城跡 指定範囲